

## シュライエルマッハー

高森 昭

聖書解釈の歴史をふり返りつつ我々が近代十九世紀の始めにさしかかるときに、フリードリッヒ・シュライエルマッハー(一七六八—一八三四年)の名を逸することが出来ないことに気付かされる。確かに彼は近代プロテスタント神学史のうえに、消し去ることのできない大きな影響をのこした人物である。そして「十九世紀の教父」として注目をあびてきたシュライエルマッハーが、今世紀二〇年代には弁証法神学によって激しい批判をあびるに至ったこともまた、二十世紀神学史の重要な一コマとして我々の記憶にとどめられている。シュライ

エルマッハー自身が神学者、説教者であることを自己の使命として確信していたのは確かであるけれども、彼が活動した学問領域は神学に限られてはいないことを、我々は注意しておく必要がある。彼は神学のみならず、哲学、倫理学、美学、教育学、西洋古典学などの各領域の仕事をしているのである。それは或る面では、シュライエルマッハーが十九世紀後半から今日に至るまで大勢となっている、細分化された学問のあり方とは異なった学問論をもち、彼の生きた時代の要請に従っていたことを示す。彼は一八一〇年に新設されたベルリン大学の教授として活動するが、その「大学論」(一八〇八年)には大学における教授たる者は、二つ以上の専門分野において講義を担当できる能力を持つべきであるという立場をとっている。

このようなことを考えると、シュライエルマッハーはまことにスケールの大きな、巨峰のような存在であると言わざるを得ない。そして我々がアウグスティヌス、トマス・アキナス、ルターなどのすぐれた神学者が、それぞれに聖書解釈の歴史のうえで無視できない影響をのこした事実を思いおこすならば、シュライエルマッハーの場合にも彼がなした貢献を必ずや明確に見出すことが出来るであろう。こんにち、ディルタイ、ハイデッガー、ガダマー、アーペル、リクールなどの著名な学者の名とともに、広汎な学問の諸領域で論議されている解釈学の流れは、シュライエルマッハーという先駆的存在を度外視するわけには行かないのである。換言すれば、今日の解釈学はシュライエルマッハーに始まる展開を知ることなしに、充分には理解されないと云える。彼以前の解釈学は聖書や法律の文法的法則を集成した、或る種の技術論方法論に過ぎなかつた。シュライエルマッハーはそうした遺産を吸収しつつ、理解する

ことそのものに焦点をあてた、普遍的解釈学の体系の樹立を志したのである。それがどこまで達成されたかの問題は後でふれることとしたい。いまはシュライエルマッハーが意図したこのような普遍的解釈学のなかに、聖書の解釈が位置づけられていることを指摘するにとどめたい。すでに歴史的批評的な聖書の研究が行われ、聖書の解釈をめぐる問題の大きさに気づきつつあった近代の神学は、シュライエルマッハーにおいて始めて解釈学の全体との接点を経験することとなったのである。この点に我々は、聖書解釈史におけるシュライエルマッハーの、不可欠な位置づけを見るものである。

シュライエルマッハーは一八二九年にベルリン・アカデミーにおいて行った講演のなかで、彼が解釈学の問題に関心をふかめ、その理論的探究に取り組み始めたのは、一八〇四年冬にハルレ大学教授として、新約釈義の講義をした時であったと述べている(Schleiermacher, *Hermeneutik*, キムメルレ編第二版(以下HKと略記する)、一九七四年、一二三頁、注四)。彼自身によるこの回想は、普遍的解釈学の体系樹立を目ざすシュライエルマッハーの関心が、新約聖書の解釈問題と密接につながっていることを示している。併せてこの時期にシュライエルマッハーは、それまでフリードリッヒ・シュレーゲルを始めロマン主義的思想家たちと知り合ったベルリン時代から手がけてきた、プラトンの著作をドイツ語に翻訳する仕事を続けていることも記憶される必要がある。このようにシュライエルマッハーは神学と西洋古典学との双方にまたがる洞察を深め得る立場にあった。ギリシャ・ローマの古典作品に関する研究が、聖書の解釈学が古代中世以来つくりあげてきたものと同じ学問的水準に並ぶようになったのは近代に入ってからである。シュライエル

マッハーはこのことを体験し得る学問的世代にぞくしていたのである。

シュライエルマッハーは解釈学になみなみなぬ関心をいだき続けたが、彼自身が書き記した著作という形では成果を残していない。わずかに、前述したベルリン・アカデミーにおける二つの講演がある。しかしそのほかに、彼は大学教授としての生涯のなかで、合計九回に及ぶ講義を行ったことが確認されている(これについては、高森昭「シュライエルマッハーにおける『神学と哲学』」(同、神学研究第二八号、一九八〇年を参照して頂きたい)。こうしたシュライエルマッハーの講義や講演類を、その原稿にさかのぼって復元する仕事は、彼の死後ながく手がつけられなかつたし、またそれが彼の解釈学を研究するうえで基本的な困難さを形づくったことは否めない。この関連で前述のH・キムメルレによる校訂本の刊行(一九五九年初版、一九七四年改訂第二版)は歴史的な意義をもつものである。かつてFr・リュッケが一八三八年に、シュライエルマッハーの原稿を講義聴取者によるノートとつなぎ合わせる方法で刊行(Schleiermacher, *Hermeneutik und Kritik*, M・フランク編、一九七七年復刻版(以下HLと略記する))として以後、我々にはシュライエルマッハー自身の原稿がどこまであるのか明確にならなかつたからである。しかし、他方でキムメルレによって提出されたシュライエルマッハーの原稿は、文字通り、彼独特の要点だけが書き残されたメモに近いものであり、逆にあたらしい研究上の困難を生み出している。こんにちなお決着をみない論争の主題も少なくないのはそのためである。シュライエルマッハーの解釈学を論ずるにあたって何よりも必要なものは、上記のリュッケおよびキムメルレ

によるテキスト原文にあたりながらの作業である。これをとばしてシュライエルマツハーの解釈学を云々することは出来ない。ましてや第二次資料による表面の論議で終わるようなことが、こんにち許されてよいわけはないのである。シュライエルマツハーの解釈学を解釈するには、こうしたきびしい緻密さが求められていると言わねばならない。

ここで我々はシュライエルマツハーが、その普遍的解釈学の枠組みに何を考えていたかを見たいと思う。彼が解釈学を単に文献を研究する方法の究明ではなく、理解すること自体を研究するものと把握したことはすでにふれた。シュライエルマツハーが同時代のドイツにおける思想家とならんで、啓蒙思想を克服することを指向していたことも、この関連で重要となるのである。歴史的に解釈することが近代の思想では必然的であることを認めつつも、シュライエルマツハーは啓蒙思想においては、それが距離をおいて眺めている觀察の集合体になる危険を感じていた。シュライエルマツハーが、単に文献に限らず、人間の精神的表現すべてを含む言語に注目して、理解の構造をとき、芸術的とも評される解釈学を指向した理由がここに存する。すでに初期の原稿に「解釈学においていつも前提されているのは、言語のみであり、他の主体的および客体的な諸前提がまたそこへとむかう所のすべての見出さるべきものは、言語から明らかにされるのである」(HK三八頁)と述べられている。さらにシュライエルマツハーは、解釈学の課題を本来的に言語の事柄として扱えつつ、その展開にあたって文法的解釈と心理的解釈との分類を行っている。これは、初期から晩年に及ぶ原稿に一貫して見出されるものである。前者においては言語の意味連関を明らかにし、言語

における理解の事柄を考察することがなされる。後者においては言語の思想内容が個性を通して明らかにする側面を示して、話し手もしくは著者における理解の事柄を扱おうとするのである。解釈の対象としての表現を、このようにシュライエルマツハーは文法的・心理的側面より把える。かくして解釈を個別より全体に及ぼしつつ、また対象そのものを渾一の統合体として見る所から表現の個性理解へと進むことになる。

さてシュライエルマツハーが解釈学の課題を適切に表現した言葉「語られたことを、原著者が理解したと同等に、そして原著よりも良く理解すべきこと」(HL九四頁および一〇四頁、HK八三頁および八七頁より引用)にふれておきたい。この句は、更に良きものを目指す理解の課題を示したものととして、ベッグ、ディルタイを始め後の解釈学をめぐる論議に影響を与えたものとして有名である。加えて今日の研究ではこれと類似の発想が、同時代のカント、ヘルダー、フイヒテにも見出されることが報告されるようになった(たとえば M. Redeker, Fr. Schleiermacher, 一九六八年、二五六一―七頁)。このことはシュライエルマツハーの解釈学がもつ独自の位置を変えるものではない。彼が個性のつきまはすことではないことも深く知るゆえに、解釈の課題は無限であり更に良きものを目指すべき理解のあり方を探究したと言える。完成した体系として残されなかつたとはいえ、近代における人文科学を包含する普遍的解釈学の基礎をすえたシュライエルマツハーの業績は、こんにちも忘れられることの出来ないものである。

我々はここで新約聖書の解釈に関してシュライエルマツハーが考へ論じているところを目を向けてみたい。シュライエルマツハーは

これまで述べてきたような普遍的解釈学の特殊な適用として、新約聖書の解釈学を位置づけている。いま我々は彼がその神学通論第二版(一八三〇年)において指摘した命題を想起する必要がある。

すなわち「新約文書の特殊解釈学は、正典の固有な諸関係を顧慮しつつ、一般的法則をより精細に規定することによってのみ成り立つ」(神学通論、第一三七節、教文館、一九六二年、七一頁)。またシュライエルマツハーは新約の積義にあたって基本的なものとして、高等および下層批評、原語の知識、歴史的資料を利用できる能力をあげている(前掲書、第一一〇―第一三二節)。しかも神学の勉強にたずさわるすべての者にシュライエルマツハーが求めているものは、ギリシア語、ヘブル語(アラム語)を媒介とする「新約聖書のヘブライふう語法の本質と範囲について」の洞察であった(前掲書、第一三二節、六九頁)。このように言語の問題を考察することによって、おのずから見だされてくる特色にもとづき、新約聖書の解釈学を普遍的解釈学のなかに位置づける努力をシュライエルマツハーは行っている。事実、シュライエルマツハーの解釈学原稿には、初期より晩年に至るまで上述の視点から特殊の解釈学としての新約解釈学の諸問題がふれられている(HKを参照して頂きたい)。その際に彼が旧約の解釈学を独立の主題としては取り上げずにいることは、西洋古典学と新約学の関わりを覚えて成長したシュライエルマツハーの姿勢を端的に示しているように思われる。

しかしシュライエルマツハーが出来事を、既存のものから歴史的に説明することのみで明らかにし得ると考えていないのは明らかである。彼が新約解釈学の根底においたものは、新約聖書の多様性のなかににおける統一性を支えているキリストにはかならなかつた。「新

約の著者たちにおける共通した生きざま、キリストの存在と精神とを、常により完全に把握すること」こそ、シュライエルマツハーにとつて最高の課題にかならなかつた(HL二三六頁より引用)。ここに我々は新約の解釈に際して信仰的認識を顧慮する、神学者シュライエルマツハーの姿を見出すのである。

十九世紀の初めにシュライエルマツハーは確かに聖書解釈の歴史に忘れ得ぬ貢献をしたが、彼によってもなお解決されずに残された課題があることも忘れてはならない。今ここに二つの点を指摘してみたい。第一にいわゆる「神学と歴史」に関わる問題である。シュライエルマツハーは教義学と聖書学の緊張がもたらす危機を良く知っていたが、今日から見れば明らかに近代の夜明けに直面したキリスト教の危機感であった。このような地盤が大きな変化を経験した現在、シュライエルマツハーが普遍的解釈学との接点において見出した新約解釈学の位置づけは、前提そのものが危なくなったのである。そこに根本から新しい批判的吟味が求められるのは当然である。第二にはシュライエルマツハーが旧約の解釈を独立した主題として取り上げなかつたことである。シュライエルマツハーの問題意識としてやむを得なかつた制約が認められると共に、新約と旧約の関係は聖書の解釈における重大な争点である事実を、我々は回避することが出来ないであろう。

残された課題の存在は、いま我々にシュライエルマツハーを単純に模倣することではなく、彼がのこした業績との真剣な対話と突っ込んだ折衝とを求めているように思われる。この意味で一五〇年前に活動したシュライエルマツハーの問題は終わってはいないのである。(関西学院大学教授)